

史料紹介 森本州平日記（四）

東京大学文学部
日本近代政治史ゼミ

はじめに

ここに紹介する森本州平日記は、一昨年刊行された『東京大学日本史学研究室紀要』第十三号（二〇〇九年）に筆耕した、一九三〇（昭和五）年三月から五月までの日記の続きにあたる。なお、一九二四（大正一三）年一月から二九年八月までの日記については、神戸大学教授須崎愼一氏による筆耕が、『論集』（神戸大学教養部紀要）三十五号（一九八五年三月）から五十号に連載されているので併せて参照されたい。当ゼミによる筆耕は、須崎氏の仕事を引継ぐ関係にある。森本州平（一八八五年～一九七一年）の閲歴については、『紀要』第十一号に、『論集』（神戸大学教養部紀要）三十五号掲載の須崎氏による解説を載せてあるのでこちらも参照されたい。

近代政治史演習の時間において森本州平日記を読み、翻刻する上で、何の制約も課されず自由に使用する許可を与えてくださった森本信正

氏にお礼申し上げます。また、前回同様、今回の筆耕にあたっても種々の便宜を与えてくださった飯田市歴史研究所の齊藤俊江氏、伊那近代思想研究会（森本州平日記を読む会）代表の松上清志氏にもお礼申し上げます。

近代政治史演習の参加者は原則としてすべて筆耕にかかわった。参加者は以下のとおりであり、所属は筆耕当時のままとした。立本絃一、志賀桜子、山本ちひろ（以上、大学院修士課程）、有吉拓朗、佐藤愛果、田所伸悟、村井隆太、岡本恵利、佐竹康扶、谷森太輔、井上陽介、梅田真治、大口智秀、太田仙一、国分航士、前田亮介、山本大樹、岩田周、宇佐美有香、川口達也、吉田興、吉田なつめ、米岡耕平、渡邊宏明（以上、学部生）。長谷川玲（学習院大学学部生）。

日記の翻刻にあたっては、漢字片仮名表記を漢字平仮名表記に改め、旧字体は原則として新字体に改め、不明文字については□で表記した他、可能な限り原文に忠実に起こした。なお、ごく一部、森本家にかかわる私的な記述、個人に関する評価にかかわる記述などにつき、

〔省略〕あるいは**などにより伏せ字扱いにした。

(文責 山本ちひろ、湯川文彦、太田仙一、前田亮介、国分航士、吉井文美、加藤陽子)

森本州平日記 一九三〇(昭和五)年

六月一日 日曜

伊那社問題の研究には青山と江塚を差遣して如何に成行べきかを協議せしむ。之れ彼等が内に居て外部問題に彼是口を挟みたれば實際問題に当らしむ。予は自ら県より出張したる検査官小沢及木下の両氏に對して、県は伊那社問題に關し伊那社のみより一方の言を信じ徒に連合運動に名を借り不出荷組合を趣違者の如く取扱い、神稲組合の如きは汽罐の検査の名をかり其の高圧的手段に出でたる等、県の態度甚だ面白からず。当組合の検査の如きも或は何か欠点を見出して責めんとするのコンタンなるべし。検査官小沢より看貫を命じたるも惣代会前なればとて看貫出来ず。少しも看貫出来居らざる事に付き稍不満の色見えたるも、種々になだめて貯金の一部及信用貸付に付監査を了し、日没頃引上げたり。石原、吉川両氏立会、検査は兩三日延期する事に話出来たり。此検査によりて証書の不備なるもの、従業員に對する貸付、未収入の整理等重要なる事項を発見せり。(後略)。

社会の今日 東洋国際競技あり。

【語句の説明】①看貫：商品や貨物の貫目を量ること

②青山：青山金三郎、村産業組合専務理事

③江塚：江塚佐三郎

六月二日 月曜

午前十時より本所に役員会を開きたれば午前八時頃出かく。支所にて江塚に會し、昨日の伊那社に於ける研究問題に付其の経過を聞き

て本所に行。青山専務より尚詳細に亘りて伊那社に於ける協議に付報告を聞き、惣代会前に於て役員会に對する対策を研究す。兎に角、伊那社問題に付ては役員が最善の努力をなすから一任されたと諮る事に決して惣代会に臨む事とせり。惣代会に於ては総ての議案決了し、高階より製糸部帳簿の改ザンの件、及犯人に對して退職金を支払ざる事等に付質問あり。将来不正は戒飭する事を告ぐ。集まる者漸く過半数に達し無事終了。神栄会社川口氏來組し面會す。然し別に何等の用件なし。只伊那社問題に付來訪したれば立寄りたりとの事なり。共に上飯し飯を共にする積りなりしも、南倉の重役会あり其他暫く銀行を休みたれば行務ありて、彼と會見するを得ずして、彼に胡桃を三円贈呈したり。

受信 吉野福一、勤労党寄付金の件。

発信 吉野福一同上。

六月三日 火曜

上飯銀行へ出勤す。終日銀行務を当軸して午後六時帰宅し釣に行く。僅に二尾を獲たるのみ。本年は鮎の遡上も未だ少く一般に魚族少し。県より会計検査に來りたるも書又キ出来ざれば兩三日、他組合を検査したる上來組せられたしと申込み、小沢属其旨を了として去りたる故、鼎組合を見たるべし。静岡県小林より 聖上陛下県下御巡行の画集書及写真等寄贈せらる。

六月四日 水曜

組合支所に行きしに県の会計検査小沢木下来組したれば之に立会い、午後三時迄支所に居る。光沢検査及単に帳尻を合わせるだけの検査なりしも立会いて説明を試み、時に伊那社問題に關し県の伊那社に對する態度の緩にして吾々に對する酷なるを責む。伊那社不出荷問題に關連したる検査なる事明なり。

午後三時上飯し銀行に出勤す。行務を聴取して終つて、午後五時より開かれたる南倉重役会に臨む。大田実三氏來りて、責任を負ふから寛大なる処置を取られたしとの釈明あり。之を了として明五日監査会を開きて太田氏の責任額を定め、尚且倉庫のバランスを縮小して今後之に當る事、等申合せて退散す。

岡嶋商店へ米百俵売る事を電話にて話す。一駄十九円五十銭なり。カド屋にかけしも十九円位と云ふ。

六月五日 木曜

朝より組合支所に行き県より出張したる検査官と折衝し検査をうく。午後は本所に検査官と共に本所の検査をうく。午後三時専務來組したれば専務に譲りて上飯す。銀行を経て南倉重役会に出席す。監査役四名來り。太田実三氏より申出たる「寛大の処置を取られたし」との伝言をせしに別室にて監査役のみ協議して太田氏の責任額九千余円を査定し之を引受けられたしとの事なれば「太田氏の寛大と云ふ事もあれば、今少し寛大の処置をとられたし」と予が云へば、若し他の重役にて引受けられれば今少し寛大なる案を出すべし、然らざれば之にて太田氏へ話されたしと分れ、太田氏を呼びて此旨を井上氏と共に語れば、太田氏考へて後返事すとて別れたり。夜に入りて帰宅すれば、養蚕六日目病蚕出つと掻き居れり。余り多からざれども稍不良の蚕あり。

予記 桑売買なし、残桑沢山の模様。

六月六日 金曜

養蚕、村内始りたり。上簇のものは早き方にて五令六七日多かるべし。桑は残桑多く村中にて一割位は残るべし。桑の成育よく氣候進みし故なり。養蚕は一般に上作の様なるも繭価一般に安く四円五十銭―五円位なるべし。午前中銀行へ出勤す。頭取、長野に於ける銀行協会の大会へ片桐を同伴して行く。野菜エンドウ一包山本子供の処へ送る。***より電話にて借入金受判を頼れたるも断りたり。午後組合へ來り役員会に臨む。伊那社問題に付協議し不出荷組合をミドリに集合して伊那社改造運動に付協議すべく決定し、それぞれ電話にて通報せり。役員報酬分配案を原案を出して承認せしむ。借入金拾万円計り仮渡資金として借入方を承認あり。又仮渡金は百四円位あるべし。一任せられたしと諮る。銀行へ下田を呼びよせて思想史販売方に付命じたり。中原と電話にて協議し、綾川氏へ弔ふ事にし香奠五円贈る事とせり。予記 太田実三氏來行し南倉問題は如何にせばよきやとの問に對し、昨日も極力寛大を請ひしも致方なければ、其の呈出せられたる金額に付明細なる説明を試み、責任分と然らざるものとを分別せられたし、併して決心をせられバ、何とか法方を講ずべしと答えたり。

六月七日 [記事なし]

六月八日 日曜

午前九時から組合支所で青山江塚と伊那社総会に付て相談した。午

後一時から伊那社で総会が開かれるので出席した。伊那社更正の会合であるので殆ど全部出席した。第一案の定款変更の件で組員役員は増員、其他一部の改正に止めて伊那社を實際上の更正のみに止めんと計った。併し前日に不出荷組合の相談もあり、岡村と予とが一線に立って戦ふべく決したので、始めから予は闘志を以て望んだ。其の總會の議事は誠になつて居なかつた。

始め岡村は定款変更を役員増員のみに止めんとし、予は定款大変更出来たる後、新定款を定めたるを如何と呈案したが破れた。それから役員改選などの種々の事項があつたが、マルデ会議がなつて居ない。予は議長に故障事件ではないかと注意した。併し之れも破れた。徹頭徹尾変テコな総会に終つた。午後五時頃支所へ歸つた。不快な日であつた。

六月九日 月曜

伊那社定款起草委員会があつたので午前十一時頃伊那社へ行つた。其れより前、組合支所で青山、江塚と打合せた。伊那社の委員会は午後から始まつた。伊那社の会合に珍らしい和氣霽々たる会合で、殆ど吾等の主張が全部容れられた。岡村と予とが合して多く説明の衝に當つた。議事は五大綱目に付て其の定款に規定すべき事に付論じたが、其要点は、所属組合産額の全部を伊那社の荷として出荷する事、単独個別荷作と協同荷造と原則併用、代金は荷主組合へ直送ノ事、但し歩合金は損価より伊那社へ振込の事、販売は荷主組合の意志を尊重する事、歩合金は販売金額によりて負担する事等であつた。送金事項及出荷事項といった議論があつたが結局縷々説明して伊那社を簡別荷造連合会の形として外部に対しての力となす事とした。午後五時、本所に

歸りて事務を見て賞与金を議した。又本所で従業員会を開いて受入、干燥等の事務に付打合せた。役員も来て晚餐を共にした。牛肉と酒を予からオゴツタ。

六月十日 火曜

上飯して銀行に出勤した。信連支所に信連から深井氏以下三名來飯して郡下産業組合を招集して信連事業上に関して話があると云ふので、午前十一時頃出席した。信連の貸出の話や其他の件々が沢山話された。が別に耳新しい事もないしするので、辞し去つた。桜町で山本の父と会ふて父の脚の神経痛は如何たと慰問した。信連の会合は単に指示事項のみを黙して聞いて居た。銀行では共栄社の残藪の処分と共栄組の生糸荷物の目切を金田から報告があつて何れも良い話ではなかつた。午後大平出勤したから、重要な行務を報告し、井村氏より提出された南倉辞表も見た。野原文四郎氏來訪して井村氏が南倉社長として病軀、職に堪へざる旨話があつた。

河野邦文堂印刷店主來行したので、思想史を巖松堂へ委託販売方を頼んだ。午後五時帰宅して釣に行つた。併し本年は魚類の生息極めて少なく、僅に四尾を獲たのみであつた。

信濃時事に伊那社總會の記事が出て居て、岡村と予とを比較して予の事を誹謗した記事があつた。

【語句の説明】①大平…大平豁郎、一九二二年一月百十七銀行頭取に

就任、一九四〇年三月に飯田銀行会長就任。

②信連…有限責任長野県信用組合連合会

③巖松堂…出版社、古書と新本も扱ふ

六月十一日 水曜

組合を巡視して後上飯す。銀行にて電話を以て下田に思想史を各書店へ上十、並十合せて二十部委託販売をなさしむ。手数料は壺割の約にて八月一杯に全部片付きたる時は一割、若し片付ざる時は歩引すると云ふ条件なり。明日各書店へ配本する事を約す。米価高騰し一駄十九円五十銭より二十円迄売り払ひたり。大沢国弥住宅普請し、増恵をして祝はしむ。和気子歯痛あつて歯科医へ行く。帰宅して釣に行きたるも一尾も獲ず、本年は最も雑魚少し。

社会の今日 第二次家屋税調査委員会を開く。

【語句の説明】家屋税：家屋所有者に対して府県税家屋税、その付加税として市町村税家屋税が付加されていた

六月十二日 木曜

天下大乱の兆あり浅間山噴火すと云ふ。倫敦会議の結果対米艦数比率を財部海軍大臣は軍令部の意見を採用せずして、国防の責任は内閣が負うとて統帥権を無視したる事項、議会以来問題となりて論議せられつつありしが、遂に加藤軍令部長の引退となり統帥権問題より、惹いて軍部と政治との間に大問題を起すに至り、遂には国体にも影響する大問題とならん。軍紀は益々乱れん。失業問題、不景気、争議、赤化思想、政治の腐敗等大乱の兆歴然たり。

朝組合支所に至りて一巡して後午前十一時頃上飯銀行出席す。支所にては春爾入庫始まりたり。本所にては既に昨日五百貫計入庫ありたる旨聞及びたり。南倉倉庫問題に付、頭取と打合せ太田氏父子を呼びよせて、曾て監査役より提出ありたる太田氏責任問題に付如何に処すべきかを問ひ、南倉に付太田氏の責任分と否らざる分とを区分し、監

査役を歴訪して了解を得るより外致し方なしとして、遂に南倉へ片桐を伴ひて取調をなす。

予記 太田氏は唯瘦せたり。大眼を開きてキョロキョロするのみ。如何とせばよきやとのみ云ひ居れり。頭取の命をうけて井村萬之助を訪問し、辞表を返却す。又南倉減資、重役会を開く事等につき打合たり。井村氏は辞表を出し、病氣と称して出勤せず、倉庫は正に伏魔殿たらんす。

社会の今日 海軍々令部長辞すと新聞に出づ。

【語句の説明】井村：南信倉庫の社長

六月十三日 金曜

雨降らざる事数日雨を乞ふ事多し。組合本支所も経て上飯す。組合本所爾受入千七百メ、支所も百貫あり、干燥場其他を巡視す。銀行にて太田実三父子に面会して南倉問題に付予の意見を申述べたり。午後一時より伊那社に於ける定款事務細則に付起草委員会あり。岡村、原森徳、原経一、木下照一等と共に起草することとなり出席したるに、北原一郎の原案に付種々協議したるも、清水謹一連合会長となる野心多く、其定款起草は皆彼の野心と不誠意に出たるものあるを以て、定款を大改正の意なく徒に小刀細工を以て糊塗する計画なり。因て、種々意見を述べたるも、南倉の重役会に招かれて出席し、江塚佐三郎を呼び出して代理せしむ。次で南倉重役会に出席し太田氏問題を井口喜代松氏より代弁せしめ、今期損失二万円を計上する事となり、其他事務員問題に付ても話して、午後六時再び伊那社に出でんとせしに、既に問題は終了して帰途江塚佐三郎と話して帰る。不誠意なる伊那社問題には癪に障る事のみ多し。

【語句の説明】①清水謹一…当時の伊那社会長

②北原一郎…産業組合下伊那郡部会専任指導員

③太田実三…南信倉庫の取締役

六月十四日 土曜

組合支所を経て上飯した。爾がボツボツ入庫する様になった。爾価は三十六七掛の相場となった。伊那社へ立寄つて武田専務に面会して、定款事務細則起草委員として左の注文をした。販売方法は重要な事項に付定款へ規定すべき事、長糸出荷と個別発送との費用負担の限界は確然と区分し、後に至りて紛争の種とならざる様規定し置かれたき事、委員会の始まる前に当つて起草委員会を開き、今一回充分考慮する事。

議事録に署名して退いて、井村氏を訪問して銀行より書記を差遣する事の不可能となりたる事、及村松吉次郎氏を頼みては如何と云ふ事、其他倉番一名を採用する事等につきて了解を得たり。井村氏は他に適當の代理者あれば何とかすると言はれたり。

【語句の説明】村松吉次郎…松尾村出身の真言宗豊山派管長に村松智道がおり、近親者か

六月十五日 日曜

朝松岡屋が米を買いに来て出庫してやった。五拾俵自動車で運んで行った。門前の小川の側に植へてあった小松をくれと懇望されて与へる事として喜んで自動車に積んで帰った。組合へ出勤した。午前中支所に居て午後本所へ行った。龍門寺和尚を訪問して、七月二日の無尽の事等を相談した。和尚は開山様の木像が出来たと云ふて之から開眼

すると云ふて居た。本所で役員会の事等を専務と話し合い、干燥受入の事等話して松島乙次郎と共に帰った。帰途宮内貢が入行希望の由を聞いて、若し希望ならばやつて来いと云ふ事を告げた。

伊那社問題でガミガミ云ふたので稍少し云ひ過ぎたと思ふて居る。黙徳を守るのが第一である。

【語句の説明】無尽…庶民金融のひとつ、無尺講、頼母子講

六月十六日 月曜

朝直に銀行へ出勤した。頭取の出勤振りも誠によくはないが、近來は銀行と組合と天秤にかけて何へ行かんと二跨の藝をして居る。組合側は銀行を止めて組合へ入れと云ふ。銀行側は捕へたからはなさないヂレンマに陥つた様である。併し之れは一時的の事だ。周囲が許せば数時間の後には定まる。連合事務所へ行つて下田に左の事を令した。春日先生に作興会より礼状を出す事、松沢より思想史代収納の事、本山氏へ予が徳富氏と直接会ふて頼むから紹介をして置いてくれと云ふ事、等とあつた。

市村威人氏が来行して嘗て貸与した思想史材料の返却があつた。松阪屋が飯田劇場で売出があつた。敷布其他二、三点買ふて来た。歸りて組合へ寄て受入の状況を見た。本所三千三百、支所二千八百入爾した。夜に入つて帰つた。馬場要太郎から米の話があつたが暫らく見合せると云ふてやった。

社会の今日 無任所大臣が出来た。

【語句の説明】思想史…市村威人（一八七八―一九六三）伊那地方史研究の権威、一九六〇年、紫綬褒章を受賞

六月十七日 火曜

午前中銀行に出勤し午後村会あり出席す。村会の問題は藤田氏を公益功労者として表彰する事及追加予算なり。尚木炭焼を別業として奨励する事に付委員を挙る事となり予も亦委員の一員となりたり。夜に入りて支所にて理事会を開き、糸況の益々不況なるより繭価白一貫目四円より売三円三四十銭唱えて、先に仮渡は金四円内外にて執行理事に一任の筈なりしも、尚一夜理事に諮るの要なるに付諮りて、兎角糸況の安定を見る迄、仮渡は金參円を内渡する事とせり。尚其他二三件につき協議したり。

此日本所に於ては供繭量四千五百貫、支所式千九百貫に及びたり、會計七千五百貫となり空前の入荷なり。
父名古屋地方へ旅行の筈にて宮沢を伴ふ。

六月十八日 水曜

組合支所を経て午前十一時上飯銀行へ出勤す。支所にては今日昨日頃繭出盛りにて朝より入庫多し。青山、江塚と信託より借入金の話、及工場統一等の話も出来たり。併して大勢を統一し通すべき方法を講ずる事とせり。電話にて山林炭焼見学の日程二十五日を二十四日と定めたる件等につき役場より話を聞く。

午後銀行にも*村*人来訪して後藤の整理の後始末として金をネダりたき口吻なりしも、頭取不在に付空しく去る。午後五時帰宅亦つりに行きしに小鮎二尾とれたり。***来訪し、明十九日父と共に犬山町の〔後略〕。庭師稲太郎、両三日来仕事せしに本年は不景気に付赤松二本と裏庭の松のみにて止めたり。

【語句の説明】 竹村要人：村会議員、松川入山組合議員

六月十九日 木曜

組合支所にて青山と打合して十一時伊那社行、組合にては本支工場合併を先決問題として交替就業の二部制度を行はんとして研究しつつあり。尚此糸価の不況に際し農村の疲弊甚しく或は納税等も如何なるべきか等憂慮すれば、国の将来恐ろしくなる。伊那社に行きたるも未だ集まるもの少く一時間計り銀行へ出勤して事務を見、再び伊那社へ引返し定款起草委員会へ出席し、長糸出荷と個別出荷の経費負担の状況を調査せしめ午後四時より改正委員会に諮りたり。

問題となりたるものは全国販連加盟を定款に挿入するか否か、挿入する論者は政府側にて原と北原のみ。組合側は伊那社の未固定せざる事、出荷を強要せらるる事。直輸出も計画せられつつある際、更に全販連へ出荷するが如きは屋上屋を架するものなる事等につき論じ、官僚側は組合運動と云ふ一点を以て論じ、遂に明日まで保留する事に話出来たり。次で会長及副会長二名の問題は予は副会長の要なしと論じ氏も同じたれば、原幹事長の意志も尊重して原に一任と決せり。
予記〔前略〕孫一の所へ手伝いに下男をやる。銀行にて松沢六三支店長来り尚予と村費との話あり。

六月二十日 金曜

上飯銀行へ出勤す。昨日誕生日なりしも行員にオゴル事出来ざりし故に、本日菓子一人に付十五銭宛オゴリたり。頭取来行したれば経済界の前途に付相談し支配人を集めて協議したる結果、此の大勢を如何ともする能はざれば進展に待つも用心して此難局に当る事に決したり。午後一時より伊那社に総会開かれたれば出席す。先づ委員会ありて大

日本生糸販連に入会の可否を問ひたるに予は不賛成を唱へたり。理由は伊那社更生せられんとして未だ其緒に付かず、内部の結束を強固ならしむるに一段の努力を要すべき時に際し大販連に加入するが如きは時期尚早なり、と論じ一時は大勢之に靡かんとせしに、二木氏加り県より奥原主事加りたる結果、平野、清水、光沢等力説し他の意志勢弱なるもの之に加り大勢又不利となり、遂に総会に臨む事となり、清水は之を加入する事に決したりと報ず。予は又之に對し不賛成の意志を發表せしも他に賛するものなく、遂に激戦に破れたり。依て岡村に辭職の旨伝言して帰宅す。

予記 予は総会に於て、未だ更生伊那社の基礎堅からざるに大販連に加入するか如きは賛成し能はふる所なるも、それが為に伊那社の基礎に影響なきやと問ひ、清水氏は其心配なしと明言せり。

【語句の説明】奥原主事：奥原潔、県の産業組合調査会幹事

六月二十一日 土曜

組合へ神栄より川口氏来ると言ふので朝八時出張すれば本所へ来りたりとの事に青山江塚と赴けば、吉川、田中、市瀬等も来り合せ本年の糸の売却につきて夏挽中一万五千斤を神栄に託する事とし、其他の返却につきては、荷為替欄四百円とし期日其他は追而打合せする事とし成行約定を行へり。

塩沢三吉の病氣見舞に赴き枕頭に彼を慰問す。病既に重く快癒の日は不測なる様みこみられたり。八幡みどり^{八幡みどり}に於て川口氏と面会、吉川、田中、一瀬、江塚と豪勢に昼食を喫す。午後四時上飯し銀行へ出勤す。生糸問題に付ては今八九月に至れば滞荷癒々多く保証糸二十万梱の外に尚新糸十万梱に及び、世界的不景氣と共に癒々生糸価下落し六百円

或は五百円位の相場を出現せざるやもはかり難しと論ぜらる。予も此説には賛し、此際組合としては充分警戒するをよしとし、尚桑畑の米作田となし得れば米作にすべしと論ぜり。

【語句の説明】：塩沢三吉、村会議員

六月二十二日 日曜

朝組合へ出勤せんとしつつかありしに下平政一來訪し大平小洲伝を書きたれば其れの標字を父に頼み置き出来たれば一覽せられたしと小洲伝を持来る。彼と書の話^話をなし、又書論を闘はしたるに、彼は小洲先生が南画として詩文の出来ざるも南画として別に差支なきと云ふ。予は南画は詩文の要を説けり。午前中彼と書画論を試みて費へ、午後より松下の葬式の為上飯し大雄寺に和尚を訪問し禪談を試む。

初七日に招かれ墓参して雨の中を組合に帰り生齋受入状況を見て帰宅せり。父が下平氏に自己の伝記を書かしむるはよけれども、下平氏が大平小洲翁の伝記を書きたるが如きものにては満足すべきものとならず、現時の松尾村の姿即ち父の履歴なり。

【語句の説明】大平小洲：飯田市千代村出身の南画家

六月二十三日 月曜

組合より伊那社役員会ある筈なれば出席して予の伊那社に対する態度を決定して後伊那社を去らんとして伊那社に行けば、また会同する理事少く両三人来り合せるのみなれば武田専務に合いて次の通り申込む。「予は更生伊那社の定款事務細則起草委員として其任を果したるも一身上多忙なれば到底伊那社の理事として勤めかねる故、此機に辞任したし。若し辞表提出の要あれば追ひて呈出すべし」と告げて伊那

社を去り銀行に来る。

原貞次郎午後來訪し曰く、君は伊那社の理事を止めるとか云ふが出所進退は容易にすべきものにあらず。此際予に一任せんかとの事なれば予は現伊那社の更生は容易の業にあらず。内部関係より段々破たんを生ずるやも計られず、併して販売組合連合会の如きは単なる公益法人とは異なり連帯して自己の私財迄を提供を要するの事業なり。故に徒に彼等と伍して仕事をなし能はず、又真に伊那社を更生し組合員本位を以て進むべき誠意ある人とならば伍して進むべしと申へたり。一任せよと云ふから然ば一任するもよけれども然るべし□計あるべしと述べて原帰す。

予記 後より電話にて松沢よりも原貞に同様の事申出あり、一任する事として返事せり。

【語句の説明】原貞次郎：県の産業組合調査会幹事長

六月二十四日 火曜

村会より木炭焼実地視察の為一町三ヶ村山林視察に出張する事となり出張す。朝七時江塚タクシーに集合して出発す。同行木下千之助、江塚佐三郎、竹村要人、福島国雄、本塩助役、千田技手と予なり。押之沢の状況を見て入道より赤松を越え瀬戸沢に出て炭焼の実地を見る。初夏の薫風清々しく山氣迫りて緑蔭に憩へは爽快言はん方なし。経済界不況なれば村民に山林組合の山林を払下げして之に別業として製炭せしむるの要あり。村の産業組合にても之を賛同して別業の助長をなし産業奨励の資金を貸出して其の製品を組合に提供せしめ、組合にては等級の差定をなし之を組合員に売りて其の代金も等級によりて配分せしめんとするものなり。

帰途風越プールに立寄りて湯に入り休憩す。宴盛なるに至りて竹村大声を發し盛なれば江塚と二人してヌケて帰る。父名原地方旅行より正午頃帰宅せり。金婚式銀盃を京に注文し〔中略〕帰る。

【語句の説明】本塩助役：本塩茂次、一九二六年から一九四六年まで助役

六月二十五日 水曜 (記事なし)

六月二十六日 木曜

朝六時半新宿駅に着いた。平田宗平と三十年振りに会ふたので奇遇を語り、旧交を温むる為、停車場樓上の西洋料理にて朝食を彼平田にオゴリる。直に東京日々新聞へ訪問す。

未だ時間早く吉村氏も出勤せず十一時を期して再び訪問し吉村氏に面会したるに、懇に種々説明せられ徳富氏午後一時頃來社すべければ面会せよと云ふ。再会を約して午後一時出社すれば徳富先生面会すと云ふ。招かれて徳富氏の室に入りて面会す。身体肥大して温顔に左の眼少くして人を見る。予は下伊那が先生の來峽を願ふ事、久しく天龍峽に先生を待つを久し、山陽先生が耶馬溪を天下に紹介せし如く先生によつて天龍峽が天下に召介せられん等話したるに、是非下伊那へは行つて見たいと前から思ふて居るが、本年は行かれん、明年の事を云へば鬼が笑ふやも知れざれども明年行く事としようと言はれたれば、強いて請ふもよろしからずと思ひて再会を約して辞す。後より吉村氏より電話にて此談は切らん様にして時期は未定とし置かれたしとの話あり。

予記 駿台荘に入りて憩ふ。文部省に中田学藝官を訪問して映画の事

に付問ふ。稲葉督学官に紹介してもらへり。

六月二十七日 金曜

朝辰野へ着いて直に電車で帰った。銀行へ出勤した。期末で店頭も多忙であった。午後一時から重役会が開かれて期末決算の問題や生糸資金投資回収の状況を報告した。金田に共栄社の投資と回収不純に陥らんとしつつある貸の□とさせた。日銀松本支店長より従憑のあった減配問題に付て頭取より報告のあった後、当行の問題を如何にすべきかに就き諮ったが、頭取は松本出張の節一分減を承諾して来た手前一分減を主張し他の重役は現状維持を主張して意見二ツに分れた。予は頭取の意見に反して他の重役の意見と合致した。処が頭取は罵て曰く、常務として頭取の意見に従はぬは不隠当なりと。予は彼が予を一使用人として見て居る此態度に不満であり、頭取の兇戲的態度に不満なりしも、余り其点に付ては彼に反抗せずして現状維持を主張した。遂に議はまとまらずに終ったが、重役会終る後仙安で夕食を喫して分れた。社会の今日 農村不景氣襲来無尽等立たず。

予記 蚕糸に眩惑し米人の意を迎ふる糾々たりし我國民に対する天の声なり。不景氣も明年一年位は続くべし、と考へらる。

六月二十八日 土曜

組合支所へ出勤した。横浜問屋から来た手紙を検した。神栄から種々申込があった。工場を一巡した。解舒がよいので十本位は平均繰糸出来るし、一般のものが皆面白く張り合のある働振をして居た。午前中支所で井沢を督して繰糸計画を立てさせた。午後から本所へ行つた。専務に会ふて湧川の来た事や伊那社問題に就て話した。湧川は伊

那社で如何に成行となるかに就て未だ微妙な話があると云ふので商談出来ずして去つたと云ふ話を聞いた。専務と仮渡金を参円半と決して七月二日より貸出す事を話した。それから午後三時上飯銀行へ出勤した。利息の未収の多い事及太田取締役の利息未入の話も聞いた。午後八時帰宅せんと市内自動車で帰った。広小路の店中に突入して雜貨商の店先の商品を損害した。大平堂其他八等の通帳のかけを支払ふた。繭価が三円半位なので農村は支払も出来ないと言ふ事が新聞紙には大きく掲載せられ無尽の中止等もあつた。自動車中で小林洋右氏に会ふた。

予記 氏と伊那社問題に付て話した。經濟問題は自由放任よりよい事はないと予の意見を述べた。

発信 木下裕助、***へ思想史代金の請求をした。

【語句の説明】解舒：繭から生糸を作る際の繭糸のほぐれ状態のこと
で、製糸工場での作業能率や生糸の品質に大きな影響を与える

六月二十九日 日曜

組合支所より本所に戻りて事務を見る。利益貯金の停止と、仮渡金の繭一メ目に付三円半を決し各理事に通知せしむ。午後三時上飯し銀行へ出勤したるに銀行も亦利子の受入に付て日曜日なるに關らずに口より入りて業務をなし居りたるも利子の収入よろしからず。殊に大口に對しては利子の未入なるものあり。其の用意を欠くと云ふにあらずして繭価上伊那地方は二円七八十錢なり。此際如何にすべきか呆然たるもののみなり。極度の農村悲觀状態に陥り如何ともすべからず。恰も革命前に於ける如き状態にて何時如何なる不吉なる事件起るとも予想すべからず。

一般人気極度に悪化したり。納税不払其他教員給料三割減等新聞上に出て、却て人気を悪化せんやも知れず。

南信倉庫に重役会あり出席す。井上氏より土地売渡等の件につき報告あり。終つて帰宅す。

社会の今日 糸価の暴落農村極度の不況なり。思想悪化。

六月三十日 月曜

組合支所に午前中居りて半期末決算等につき其状態を見、且つ小沢県属等の産組検査に対する報告書と原稿書きて一ノ瀬に渡す事とせり。木下元一郎死亡し葬式ある由に付香奠金一円を木下房吉に託せり。午後に至りて出行し半期末決算の状況に就て見る。極度の悲觀に陥りつゝあり。我国経済界の戦後膨張の一転機にして物価下落し、思想悪化、政事行きつかれ或は恐る革命（経済的）にても起らんかと疑はれたり。銀行の配当も七分を六分にせんと頭取主張し（日銀の招に応じたる以来）、他の重役は之に反対し予も亦之に反対して時期に非ずと主張せり。併し頭取は頑として聴かず六分説を固持したれば、頭取に決裁を一任したるも予は窃に此人と行を共にし能ざるを思はれたり。又頭取が組合財産を放り出して迄六分を主張するやをも理由たり。遂に而も頭取は6%とすると宣したり。午後十一時半、予は快々として帰宅したるも此事胸裡に結はれて解けず。

七月一日 火曜

五月雨止みたるものの如くなり。暑気俄かにつのり、八十五度を報し暑気にて快なし。銀行支店長会議迄開き爾糸価金及一般営業の緊縮につき打合せべく計画し置きたれば、午前中より出勤したり。支店長

会議は二階重役室に於て開かれ予も緊縮政策につき大体の方針につき一言せり。併も多くをいはず具体案は金田支配人より話さしむ。

午後二時より連合事務所に組合部会あり出席す。問題は産業組合学校の財界に付如何に善処すべきかに付ては松沢と予との間に意見交換せらる。松沢は此の如き時にこそ組合主義を以つて発展し組合の使命を果すべしと論じ、北原一郎は何か大策が出来なければならんと油をかけたなり。予は目下の経済界の苦境は単なる経済問題のみに止らず政治、社会、思想等の各方面に涉り我国の一転機なれば、欧州戦中の好景氣を頼みとして経財界を論ずるは大なる誤に陥るべし。故に此際は弥縫的の対策に止むるのみなり。岡村も松沢の説の如く樂觀説を述べたり。予と松下氏とは同一意見なり。

【語句の説明】岡村：岡村勝太郎、龍岡組合会長、伊那社副会長

七月二日 水曜

組合へ湧川泉次郎来訪すると云ふので支所にて待つ。近藤絹糸商来り種々談義し屑物を売る約束等せり。湧川来訪し本年夏挽糸円二千斤宛十日、廿日成行約定にて売渡す事に約定出来たり。約定後鳥清にて昼食を青山と共にし湧川去る。

龍門寺に布教伝道講あり午後三時出席す。吉川芳太郎も来り居りて種々話せり。講は例の通りよく集まり未収入のもの僅に三人計りありたるのみなり。和氣鬘々裡に話進み夕食後大元の和合氏の事及加藤氏の農民学校等の事を聴く。終日寺に入りて禅味に浸らんと計りしも俗臭粉々として面白からず。併し此俗気ある所に面白味もありたり。午後九時散す。高橋文五郎来り彼か組合等へ出席して民政党説演をな

し面白からぬ事多けれども敢て意に介せず彼と話せり。

社会の今日 教員の減俸をなすとか役場吏員の俸給を下けるとか各村にあり。

七月三日 木曜

午前中組合本所に居りて組合事務を見て後午後上飯出勤す。期末決算にて書類に目を通す事多し。中原来行して彼に依頼して書きたる思想史に付一覽を乞はれて読む。

安藤保太郎より電話にて五日、蕉梧堂に於て木下廉一磔死事件落着いたらば会合し度との申込ありたり。

銀行配当を如何に減せんと頭取の主張に従ふ事とせるも尚不安にかけられつつあり。当行株の下落や不評は一蹴して頭取は一朱減をなす事に決心せる処頭取の決心面白し。

宮内貢来訪し採用方如何と問はれたるに付き、重役会に於て欠員のまゝとなし置く事に決したれば（不況の為）お気の毒なるも今回は採用叶はずと申聞かせたり。

七月四日 金曜

銀行へ直に出勤す。（後略）。

七月五日 土曜

組合支所に出張す。製炭委員会役場に開かれ出席す。

製炭組合を組織する事、山林組合と産組との関係、製炭希望者募集方法、組織、講習法方等につきて打合あり。製炭補助規定等の打合ありたり。午後村会ありしが（時節柄不景氣襲来し租税も意の如くなら

ず）、経済界不況に對する対策の議研究会ありしも金井政一の父死亡し葬式ありたれば理事及組合を代表して会葬し直に上飯せり。

【語句の説明】金井政一…村会議員

七月六日 日曜

午前十一時迄自宅に居て庭の掃除をなし樋のゴミをとり等したり。（中略）。組合へ行きたるに県と保健署より来組し居れり。俸給問題を木下房吉に話し青山専務にも話す。

欄外 朝中島勘一より組合書記の俸給の話あり。

七月七日 月曜

午前九時銀行へ出頭し直に赤穂支店へ春蘭資金の放資状況を視察すべく出張す。午前十一時支店へ到着して支店長を呼び出して共栄社貸金に付取調へたる所、安価なる繭を仕入れ是非それを繰糸さしてくれとの頼みあり。一応之を拒絶すべしと言ひたるも結局其半量だけを繰糸原料として干繭一メに付金八円を以て投資せしむ事として其他の状況を話し、菅部文蔵を呼びよせて、*平一雄財産を処分して借金を片付ける事を慫慂して、共栄社繰糸場を視察して帰居し、午後六時伊那町着大藤屋旅館に入る。釣に行くを目的とし支店長を誘ひて伊那町下の天龍川に行く。

電話にて来る九日組合役員会を開くべき旨青山に通達す。又下田に蕉梧堂支払をなすべく命ず。

七月八日 火曜

伊那町大藤屋に一泊す。朝五時にテンカラ出かけたるも僅に五六尾

小雜魚を獲たるのみ。宿に帰りて朝食をすませたる上、辰野支店へ出向す。辰野支店は何時もながら社の気分清々し清新の活気ありて快よし。支店長と繭糸資金投資状況を語り其状況を視察せり。信濃倉庫を訪問したるも原安太郎氏不在につき倉庫内の繭入庫状況を見たるに、本年は当銀行が極度の緊縮を行ひつつあるを以て入庫繭少量なり。坂田の病氣を見看ふべく金壺円のモナカの折を買入れて贈り届けしめたり。

午後伊那町に帰りて伊那委託倉庫の繭入庫状況を視察す。辰野と同様にて本年は上伊那繭は最も安価にて白にて三円二十錢、黄二円、六七十錢なり。小池弥太郎氏に面接せり。又転して下平晒四の喬木館製糸を視察するに彼自身にて工場を案内せられ又自動車の運転をなしてくれB〔銀行〕迄届けくれたり。喬木館工場の合理的経営は左の点につき感心せり。釣をなしたるも思はしからずして午後八時帰飯す。

予記 一、掃除の行届き居る事。二、工場主万般の仕事をなす事（運転手）。三、自治的なる事。四、見番を使はざる事。五、高降量にて命令する事。福沢憲和氏母堂へ病氣見舞のカステラを贈らしむ。伊那町支店より現送す。

七月十日 木曜

支所にて口挽の情況を見て午前十一時銀行出勤す。石原来組し不景氣の談あり。併し人の長たるものは余りに臆病談をなすべからずと予は唱へたり。銀行にて原貞治郎より電話あり。「小西町長出県し、帆高検事正より作興会へ出張し、下伊那郡に於ける思想運動につき講演し度由」話ありたれば、作興会にて何とか話しては如何かと云う話あり。之を議し掛川校長にかけたるも不在に付伝言を頼み置けり。午後

三時半にて前沢貞治の死亡見舞に出張す。貞治九年年間中風にて病み九日葬式なりしも、会葬するを得ざりし故後より見舞に行けり。午後八時帰宅して直に伊沢一の灸點開業披露に招かれ出席す。伊沢菊次郎、全十十郎、龍門寺和尚、平栗、市村等にて晚餐をとり帰る。

社会の今日 不景氣深刻化せんとなす。社会鋭尖化す。

【語句の説明】石原…石原茂一、松尾村村議

七月十一日 金曜

朝神栄会社川口氏来組する由に付支所にて待ちしが午後來組する由電話にて申越たるに付十時銀行へ出勤せり。然るに銀行の方も決算期の為用事ありしが午後、招によりて組合支所へ行く。川口氏の要件は下久堅にては国立検査所の検査成績によりて点数に応じ価決をする由なるも、組合としては原幹事長に一任し其の採点によりて売却する事とし、尚伊那社が出浜し彼は一奔走し居れるも、ジェリー商会及日蚕会社と前の契約通り商談行はれて出浜。□□も是れに費し居り。未だ商談の目算も付かず居る由聞及ぶ。

役場に於て製炭講習に関する打合せありたるも江塚を差遣し置けり。彼より聞く所によれば八月末迄に製炭業希望者を募集し之が組合を作り、其組合長を信用して保証せしめて資金を組合より出す事に電話にて本塩に話せり。川口とミドリに行きて一献をかたむけ話せり。本所に立寄り午後七時帰る。竹村順一が皇威は要人の煽動により人心悪化し組合の勘定等は出来ざるべし。組合の対策如何。

予記 八月末迄に希望者を募集する事。製炭組合を組織する事。其れによりて資金を貸出す事等なり。

【語句の説明】①川口…川口木七郎か。川口木七郎は、生糸売込間屋

神栄会社取締役

②竹村：竹村順一、村会議員、一九二三年に下伊那郡蚕種共同施設組合大竜社社員

七月十二日 土曜

暑気甚しく□清し。

銀行に監査会あり。取締役も同席し、終りて仙寿楼に於て晚餐を喫して帰る。

七月十三日 日曜

組合に行き終日事務を統督す。

七月十四日 月曜

暑気甚だしく八十七、八度に達す。組合上返し場は百三度なり。午前中銀行出勤し午後一時より作興会幹部会ありて連合事務所に行き、徳富蘇峰先生招聘の件其他につきて話し、帆高検事正の話は教育会をしてなさしむる事に決せり。夜行にて横浜へ出発す。

七月十五日 火曜

朝六時半駿台荘に到着すれば宿の女主人病気なれば女中の統轄出来ず、規矩乱れ居るもの、如し。入浴して煤煙を流し休憩の後神田青山齒科医を経て神田駅より桜木町行に乗して横浜着。土産として椎茸の大箱四ヶを持参せり。直に神栄会社に入り川口に面会し昼食に案内せられたり。安田支店を訪問し支店長宮崎繁三郎に会す。取引先店の信用状態より生糸貿易の状況に就て話を聞き、荷為替取引の件につきて

も話し、八幡支店と当店との為替口座を開く旨を述べたり。午後湧川を訪問し、三井物産に吉田計次郎を訪問し、伊那社の販売方法に關しての話を聞き（三井にては稍不満の色を見せたり）取引を頼みて去る。青山江塚は東京へ帰りたれば予はカドヤ旅館に牧野が居るのを見て同宿せり。

七月十六日 水曜

かどや旅館に牧野と同宿せり。朝九時江塚青山東京より来り会したり。湧川より電話にて日本生糸へ振売にしたる生糸の点数今検査中なれば来視せられたしと電話あれば直に出向せり。帰りて右両名と原生糸部及湧川店より牧野も同伴、本牧田家舎と云う料亭に案内せられたり。此田舎家と云う料理屋は海に面し其建築田舎風にして閑雅なる建方なり。一浴して両三名妓来舞ひ午後三時迄宴を催す。見晴らしよく海水浴も出来よき料理屋なり。午後五時東京日々新聞吉村氏に電話したるに不在に付退浜し、東京へ来り白木屋へ立寄りて麻洋服一着を買入れ、青山、江塚と分れて駿台荘に來り納涼せんとしたるに暑気甚し。午後十一時半夜行にて帰省の予定にて江塚と待合せて出発す。

七月十七日 木曜

朝九時辰野に着。支店を訪問して近來經濟界の不況と共に人心尖鋭化し居るを以て、此際行員の言動を戒めるの要ある旨を支店長に話して伊那町へ下車し、江塚と二人なれば釣の仕度をなして川へ行きしに鮎よく釣れ、三四十本は如何なる人も釣り居る様にて、早速釣を垂れしが五六尾を獲たるのみなりしも、江塚は二十尾を獲たり。野溝準治宅を訪問し釣竿をかりに行きたるに主人居りて借りて持ち行きしに折

りたるを以て菓子折壹円を持ちて礼に行き置きけり。午後七時江塚と二人にて帰る。途中松島薫と一所になりて車中面白く帰る。

七月十八日 金曜

暑気甚し。午前中組合支所に至りて横浜に於ける生糸取引の状況及検査の状況等につきて従業員に話し、価格の件につきても有利なる取極出来たりとて話し、工場を一覧して注意を与へて後正午銀行へ出勤す。橋爪*、黒沢等の整理問題に付話あり。信産銀行が黒沢に対して三四万円の信用貸ある橋爪とも関係あり。早く此問題を片付ける方有利なるべしとの事に付て其方針にて進む事とせり。池田愛泥来行したれば生糸直取引の事及近來新聞紙の価値下落したる事等につきて話せり。帰宅して釣に行きたるも魚居らず濁り居り釣れず。

七月十九日 土曜

組合支所より銀行に出勤す。

七月二十日 日曜

組合支所より本所行、午後一時より役員会を開いて相談す。木下千之助の外全部出勤して話円満に進行せり。終日組合にて仕事せり。

七月二十一日 月曜

組合支部に到りて事務を督しつ、あれば、銀行金田より電話にて總會前なれば来行せられたしとの電話あり。午前十時半出行す。組合と銀行、組合の方が営利的ではないが事業面白く且趣味あり。何とかし

て銀行を罷めんとするも他に良策なし。

行員賞与金六千円を封入し等して午後九時過迄かゝる。封入の際金五円を誤りて之を捜すに多くの時間を要せり。

七月二十二日 火曜

銀行總會の日なるに付、朝直に銀行に出勤し、支店長会議及重役会總會等に顔を出す。支店長会議に於ては緊縮主義をとり費用の節減を諮る事、稟議規定を反復し規定通実行する事等を各支店長に話す。金田より主に営業の細部に亘る論議事項を行ひたり。此日監査役会及重役会あり。總會は代田鉄太郎、伊藤一太郎両氏を進行係に頼み置きたれば一瀉千里僅に三十分間にして議事を終了せり。終つて例により仙寿楼に於て宴会あり。出席して後再び松川プールに出かけたり。松川プールに於て納涼して午後十時半帰宅せり。予が近來産業組合と両方へ出勤する為に頭取の気嫌宜敷からず。予も亦両者にては到底勤務甚しき為疲労し且良策も出て来らず。何れか一方にしきしと常に考ふれども銀行の方も罷められず苦心しつ、あり。寧ろ銀行を止めて産業組合一方になる方予の一身上の良策なるべし。

七月二十三日 水曜

朝直に銀行へ出勤す。本年春繭に対する製糸資金も既に欠損になるらしき傾向あり。赤穂共栄社の昭和四年度貸の如きは最も大なる損害を蒙らしめられ七万五千円程あるべし。正午頃連合事務所へ行きて下田に面会し、帆高検事正を招きて何時講演（赤化青年事件につき）会を開くべきや等につき問合さしめ、且又作興会記念出版の思想史につきて各書店へ出したる書籍代集金に付下田に令し置きけり。午後三時

村議会評議員会にて出席し四年度決算面に当たる状況を見たり。組合本所に行き放課後生徒を集めてセリブレーンの良い糸を繰糸する様話し、検査規則の改正及懸賞等につき話せり。産業組合学校より来れる二人の書生に対し一場の訓話を試む。

七月二十四日 木曜

組合支所へ行きて青山専務と信用評定委員会来る廿七日午後一時より本所に於て開く事其他景況につき打合たり。工場を一巡して見るに寄宿舎内等整頓せり。又湧川店へ出荷したる糸の点数八十六点を報し来り居り。好成績なり。十一時銀行へ出勤す。近來組合の方へ多く出勤しや、ともすれば銀行の方は等閑になるので頭取は予の出勤ふりの悪きに付御機嫌斜ならず。松岡屋米店来行し米を廿円五十錢位にて売らぬかと言ふ。マア父と相談してと逃ぐ。

午後三時頃より南信新聞総会ありて出席す。十名計り来り仙寿楼の御殿にて開く。橋監査役より新聞記事の近來少なき事、及事務上に付種々なる意見出てたるも、予は総会は了りたるを以て銀行に帰りたるに既に行員帰り居り。池田屋に買物に行き午後六時自動車にて帰宅し釣に行き、赤魚ハツグイ五本を獲て帰る。おマサ按摩来り父母等按摩せしむ。

中原へ作興会報原稿返す。予は郡内の青年層の赤化時代に一般人士の思想問題に付造詣なかりしを添付せり。

予記 倫敦会議の失敗軍事参議会の問題となり東郷元帥の正論立派なり。蘇峰先生が倫敦会議の失敗を糊塗して一時的気休の甘言を以て国民を欺き国防の大計を誤るは宜敷からずと論ぜるが如きは御尤なり。

宮崎繁三郎より海苔の寄贈あり

七月二十五日 金曜

朝八時組合支所に至りて組合の事務を統轄して後銀行へ出勤時に十一時半なり。午後五時迄勤めて帰宅す。夕立降り始めて釣にも行かずして平栗と話す。夏蚕食追ひなり。下男久男主任となりて飼育し居りしが余り経過良好ならず。六十枚計りありし。父より話あり「汝の所得が増加せし故、従て其税金も亦多額に登り年額式百五十円位を納付するを要し、尚信也学資等も入用なれば所得中より家政の方へ若干宛納入する事にせねばならん」との事なれば、予は所得は勤勞所得なれば何とか其辺を考慮せられたし、又銀行の方でい、潮合を見て退き、専心組合事業に没頭せねばならん時至るべし、兎に角年額金五〇〇円位は納入しても宜敷由を答へたり。

社会の今日 統帥権問題倫敦会議にて枢府会議開くべき旨新聞に出。

七月二十六日 土曜

午前中組合支所に事務を管統す。湧川の和泉来組して曰く、近來成行約定と振売との間に五〇円乃至七〇円の差ありて曾て契約したる如き方法にては誠に損失大なれば、何とか三井（申入）人と其開きを僅少ならしむる法方を講しては如何と話されたれ、それは当方にても望む所なり、何とか交渉してもらい度し、本年の如く成行約定と振売との差ありては八月一配だけでも振売としてももらい度しと当方の考えを話したり（伊那社は毎月決定の由なれば伊那社へ対して不成績なるは面白からず）。次で銀行に出勤す。橋爪和一来行したれば彼が財産整理に付当行のとれる方針を話したり。

此日丑鰻にて鰻の販路不景氣中にも多かりし由。午後八時十七分長野より帆高検事正来飯する由に付、駅迄出迎の為用意しありしに突然

巴館席岩氏より電話あり。祖先発祥地伊那に來りたりとの事に直に訪問して久闊を舒し三十分計り話して駅に帆高檢事正を迎ふ。常磐館に送りて十時帰る。

予記 点呼執行官にも名刺を出せり。

七月二十七日

午前八時より飯田商業講堂に於て帆高檢事正の共産党事件に付て話あり。話は上手にて、且罪人に対して取扱慣れ居れるが故に話の持込方上手なり。思想問題を特別に調べ居れる程にもなし。猶太問題と結付けて共産党が国体革命の兇悪なる運動である事を説明、午後一時迄四時間話し終つて休憩して午後二時より四時半迄座談的に質問、応答も多く四、一六事件にはふれ居らざりしが、實際問題として取扱居るために材料豊富であつた。又教育者に主に話したいと云ふので教育会主催であつたが、長野県の教育は理論的教育であつて情操的教育でないから情操的教育が必要である事、及教育の効果は数十年経て表る、ものである事を、赤穂藩士と山鹿素行との話を出して遠(婉)曲に話せり。朝着飯直に巴館に入り席岩と會いて思想史壺部贈れり。講演後常磐館に帆高氏を訪問して作興会の話をなし、此後の対策に付て研究して退く。

予記 此日組合に信用評定委員会ありたるも下記講演の為欠席。

七月二十八日 月曜

組合より出て、上飯す。午後になれり。放課後巴館に席岩を訪問して共に家に案内せり。席岩両名座敷に召して一夜を明す。服部蒼雄の事績より国学の事に及び、転して白隱和尚の事等にも及びたり。翌朝

神峯案内をなす事を約せり。

【語句の説明】神峯：神之峰、知久郷柏原南にそびえる標高七七一

メートルの山

七月二十九日 火曜

暑氣強烈なり。島田友人席岩壯太郎及卓郎兩人一泊し、朝食前天竜左岸を散歩せり。九時彼等兩名を案内して神峯を訪問す。乗合にて麓迄行きそれより登山す。緑蔭中を頂き亘る風涼し。五葉松をとりて下山。山頂の巖頭に立ては伊那の峡谷天竜河の流れ眺望殊によし。サイダ二本をのみて下山。自動車にて弁天橋迄帰り彼等は阿島へ祖先の縁故あれはと云て去る。神峯にて石に刻したる則直の歌を見て彼等大に喜び繰り返し詠したり。一度家に帰り昼食して直に天竜峡二開かれたる不出荷組合の協議会に臨む。問題は伊那社販売歩合金に関する件(之れは伊那社が現在長糸出荷組合の代表機関にて簡別荷作組合には何等無用の長物なれば歩合金は摺金二十歩より出さぬ事)其他に付懇談して夕刻散す。

昇仙閣に開かれたり。

組合へ中央会より中島と云う検査官来る。

予記 銀行欠勤せり。

七月三十日 水曜

組合支所より役場村会に出席す。助役任期満了再選なり。昭和四年度決算に付ては全員を三部に分ちて、予は臨時部決算委員となり午後三時より委員会を開く予定なりしも欠席し、午前中にて飯田へ上る。午後六時石井病院に猶太郎の手術後の経過を見舞たり。猶太郎は直腸

痛にて入院し手術したるものなり。

手術大手術にて猪佐雄の血液を輸血したりと云う。組合、村会、銀行、義理等多用なるも其全体を全ふること能はず。只出席するのみなり。銀行に原貞来行したれば伊那社の長糸出荷組合代表機関にある事、及歩合金搾取機関たる事等につき話し、伊那社が益々窮況に向いて進転しつつある事を話せり。

松沢来行したれば同じく之に付きて同様の話せり。

七月三十一日 木曜

帟岩を巴館に訪問すべく直に巴館二行く。既に伊豆木に出張すと出てたる後なり。直に銀行へ出勤す。月末に付多用にて午後八時迄居りて後、帟岩の帰るを待ちて巴館を訪問す。彼等が開善寺より伊豆木を訪問したる話し等を聴きて午後十一時半迄居合せて帰る。頭取、松諏鉄道重役会議に出席して不在。連合事務に下田を訪問して点呼の模様を聞き、思想史依託販売の状況を聴取したり。

厚平帰る。宏屋根より落ちたるも無事。夏蚕上簇せり。夏蚕は下男久雄と増恵とにて養ひしも結果余り良好ならず。銀行名の暑中見舞状百を出す。此日村会決算会ありたるも欠席せり。

【語句の説明】開善寺：上田城北東房山村新田にある寺、現在は海禅寺という、真言宗智山派

八月一日 金曜

大雨降り松川天竜共に増水す。殊に松川甚しく、大平街道決潰したる箇所多く、伊那電工事場山崩の為土工三四人埋りたりと。又野底川氾濫し野底橋落ちかかり消防組等総出にて防水につとめたり。落木等

拾ひたるのみにて当方には被害なし。

夏蚕上簇終りたるも結果面白からず。

【語句の説明】大平街道：伊那谷から木曾山脈の大平峠を越えて木曾谷に通ずる道の総称

八月二日 土曜

組合支所を通して上飯す。午前中組合に居たり。

作興会にて徳富氏招聘の為上京費連合事務所より届けり。中原へ電話にて伊那史料叢書なきやを尋ねたるになしとの報ありたり。午後六時帰宅したるに松川の水流、八ヶ島に向ひたれば今の中にウシを入れ置く方よかるべしとて、近隣の者召集して牛入工事を始め夕食後より深夜十二時過迄かかりて北川原堤防尻にウシ一ヶを入れたり。信也も下男も行って水防に従事せり。終つて酒をふるまへり。

社会の今日 上伊那地方農民悪化し、教員給料引下電灯廃止等あり。

八月三日 日曜

組合行。支所にて午前中事務を見て午後本所へ行く。夏蚕上簇の注意書を出す。夏蚕一般に良成績ならず。組合本所にて金井技手に会い、養蚕立国の不可なる事を論ず。夕刻迄居りて、龍門寺に丘山和尚を訪問す。時に赤羽氏在り。無尽業法の県令厳になり、到底此法を以てしては無尽の世話人となるべきもなく布教伝道講も全しく解散するより外途なかるべしと話し合ひたり。

夜に入りて帰る。父稍不快の様なれども元氣あり。

近來世事多忙の為読書等は出来ず山積しあるのみなり。終日家居して読書三昧に入らばやと思へとも其の機なし。

八月四日 月曜

組合支所を経て銀行出勤す。喬木館来行して、資金の安田より借入たるもの期日なれば引受けくれと云う。午後五時頃迄押問答したれども、先つ出浜して問屋より借入らるべしと話して出浜せしむ。

中原来行して郡青年会中に過激分子出来、或は過激分子によりて元の郡青年会の如くせんと企つる由を聞く。吉野を召きて座光寺に談せしめんと計画せり。

作興会経費の關係にて明年は経費の支出各町村より打切りとなるやも計られず、何とかして存続せんと議をねる。町村長を動かして団体擁護の運動だけは守護したけれども、一般の町村長に左程大なる頭の持主なきは遺憾なり。

八月五日 火曜

組合支所を経て村会に出席す。午前十時と云ふに十一時より初る。

議事は更生予算にて、繰入金、積立金を延期して六千円を緊縮し、次て戸数割を減税せんとの原案なり。依て竹村より戸数割の外、県税雑種税附加税及営業税附加税にても若干の減税をなすべしと主張し、衆之に賛したり。石原より、尚費用弁償に付ても減額の案出で、福島よりも亦種々の意見出でたるも、結局余は第一次としては竹村説を賛し、第二次の更正予算として費用弁償其他小学校費等猶減額する余地なしとせず。今回は之を以て認定しては如何と云ひ、村長は条件附は困るにより無条件にせられたしと主張したり。

予は銀行に外交委員会を開き置きたれば午後四時退出、決議の様様は知らず。上飯、銀行にて外交委員会を開く。後プールに自動車をか

り夕食を喫す。午後十時帰る。

予記 夏蚕繭かき七貫五百匁を獲たり。二枚の種にて山本より周旋を乞ひたるものにて越中辺の種なり。

八月六日 水曜

組合本所行。出資証券を新しくしたれば其払込領収印を探す。又木下房吉と利下げの件并に購買所等につき話したり。夏蚕繭受入本所に合せたれば二百貫位ありたるなるべし。夏蚕繭未だ市場に現れず一般相場立たざれども二円三五銭なるべし。午前十一時専務を待ちしも見へず、去つて銀行に出勤す。午後五時帰りて釣に行く。松川伊久間街道に沿ひ流る、様に川流変し、魚の住瀬またなし。増恵、大雄寺施餓鬼に行く、信也を伴ふ。

弼より電話にて尚夫、駒嶽登山を試む由来宿せよとの事。一般不況の爲人気沈鬱なり。只米価上騰す。正米組合にて販売するもの、軽白米拾貳円八十銭なり。地米七十銭安。漢文大成着本せり。

発信 北玲吉、暑中見舞。席岩専蔵、来場訪。吉村広、徳富先生召聘の件

八月七日 木曜

午前中本都行、出資証券の調印をなし出資証券配布方を市瀬に命じたるに、旧証券と引換にては困ると云ふ様な事を申したれば、之を引換に渡すべし、軽々に取扱ふべからずと命ず。又清水をして未収入金の現在額承諾書を組合員より取らしめたものを見る。併して取る事の出来ざるものは猶取らしむ。夏繭受入両所にて出来たり。供繭始まる。一般に作柄六分と云ふ。

午後銀行出勤。喬木館来行し金策を頼まれたり。併も浜よりの出金少なければ早速引受けずして却て工場法を適用して二部制とすべき事を懲慥せり。放課後吉野来行し中原を呼びよせて、作興会の状況より青年の運動が稍もすればマルキシズムに赴き、「赤旗」支局を経て此運動隠密に行はれ居るを見て、何とか犠牲を出さざる前に青年をして興国的方面に一転せしむる方策を講ず。青年の虚無共産的に赴くは国家の将来憂ふべきものなるも、之を転じて吾等の主張の通り祖国日本の姿に帰り、興国運動を起すに至らざれば日本の将来恐るべきものを議論し、猶興社を建て其機運を此田舎より興さんと説く。時に天曇り月見れず、楼上に出て涼風に吹かれつつ現状日本を救ふべき途を論したり。九時帰る。

【語句の説明】市瀬：一ノ瀬牛太郎、村会議員

八月八日 金曜

銀行へ正午頃出勤せしに安藤兼太郎より電話にて、浦野多門治来飯したれば夕食を共にせんと申込あり。諾して置きたるに医師会にて飯田病院にて講話ありとの事にて医師連中と共にプールに行き夕食を共にせんと談まとまり、松沢數一、安藤兼太郎と共にプールに行きて晩食をなし、蕉梧堂まで帰りに再び浦野と話す。

判事^欠□の送別会ありたるも氏の件に障られて出席出来ず、手紙を以て断り置きたり。午後十一時帰宅す。銀行へ喬木館来りて資金問題の話あり。損の引受銀行は困ると喬木館の奮起を促して実業家として立つべき事を懲慥し、其の決心をなさしめて遂に諾し去らしむ。

八月九日 土曜

暑氣稍減退す。組合より銀行へ出勤す。併し銀行業務は只出頭して居るのみにて金融の前途貸付の如何等考ふれば不安なる事のみ多く、支配人一任の無能なる常務、徒に報酬を貪るのみなり。天罰当らんかを恐る。

尚夫、信也、駒嶽登山せんと企て支度したるも天候快晴ならずして止む。

伊那町方面へ鮎釣に行く事とし仕度をなす。

夏蚕一般に上作ならず半作なりと云ふ。繭質従て悪し。

八月十日 日曜

今日は日曜を利用して伊那町迄鮎釣に行く。銀行ハスを利用して伊那町入舟に下車して川を見渡せば、釣するもの鍋釜を洗ふもの網するもの等町裏の流れ面白し。投網するものより二十銭を投じて雑魚一疋を得て、先づ適當の場所かと思はる様の堤に対する所にて針を下す。竿のウラ竿中々なく、銀行支店に到りて竿の先をとり来りて試む。須臾にして直に二尾を獲たるも他にとれず。喬木製糸場の所迄下りて堤防の沈床にて試みれば、大なるもの一尾を獲、他に川岸を変更したるも捕れず。再び上流に転じ試みたるも獲ず。夏の日も山に傾きたればスポンを洗いて橋の欄干に干して再びテンカラを試みたるも更に釣れず。青山緑水を終日恣として午後六時四十分にて伊那町を出て帰途に就く。此日片桐沢迄釣に行きしも之れと結付く予定なりしも伊那町に下車したれば他に去らずして釣りたり。疲労して帰る。

増患齒医に通ふ。総齒にせんとしつつ、あり。信也、宏、山本へ暑中何の為出張し泊る。

予記 野原よりジュン来所。

八月十一日 月曜

組合支所に行く。青山と夏蚕仮渡に就て話し、一貫目式円参拾銭宛十二日より仮渡する事に決し、役員会を開かずして決したり。又人事問題及従業員両三名を横浜に出張せしむる事として任命する事とせり。午前十一時銀行に向ふ。組合にて金井、市瀬、江塚等来る。又組合にて松田政一來り、軍人分会斎藤の死後彼が会の公金を消費したる件につき話す。

上飯。銀行より青柳に電話にて徳富蘇峯先生の来飯につき蘇峯会を作るべきか如何につき話せり。午後五時退行帰宅。盆前にて福住より盆伺来る。

席岩壮太郎氏より書籍寄贈し来る。全卓郎氏より西式強健術の書寄贈せらる。

八月十二日 火曜

組合支所を経て上飯す。支所にて青山へ電話にて横浜行を僉憑し、振売と成行売との差額問題に付交渉せしむ。十三日夜行にて出発し十五日夜行にて帰郷の事に命ず。又盆中夏繭受入に付き区処を定めたり。銀行へ原貞治郎来行し、作興会及町村長会の空気を見たり。大鹿村書記来り、赤化的口吻を洩したりと聞く。北原阿知之助に電話にて、徳富蘇峯九月十日頃来郡する由奉告し、其際大会を開くべき旨話す。又東京日日新聞青柳記者にも蘇峯会を作るべきや否やに付相談せり。

銀行にては黒沢問題に付銀行団総が、りにて刑事問題とならんとするに付、寄り、相談しつゝあり。

席岩に本の礼と「伊那史料叢書」送るべきや否やに付手紙をかく。

卓郎氏には西式強健術書の礼を出す。

木下勝男来行し、明大校友会を開くにより作興会より援助たのむ旨話あり。

発信 席岩専蔵、々卓郎

社会の今日 枢密院と政府と軍事参議会奉答文提出問題にてガリ合う。世は未なり。

八月十三日 水曜

組合支所に立寄て上飯した。

組合の従業員を専務が引率して横浜へ行く事にした。上飯したが銀行では頭取は新盆で欠勤した。上柳へ菓子券二円をあつらへた。盆の応答で町へ牛蒡や其他野菜を贈った。

帰宅後八幡駅迄従業員連中の出浜を見送った。

銀行へ木下勝男が来て明治大学校友会大会があり、横田、米田、赤神の諸氏が来飯する旨を聞いた。十六日飯高講堂で講演をする事を聞いた。

【語句の説明】赤神：赤神良讓（一八九二—一九五三）、社会学者

八月十四日 木曜

小供を連れ立って墓参をした。亡兄の新しい墓の前に秋草を捧て冥福を祈った。尚夫も宏も和氣子も可憐な手を合して亡兄弟の墓に合掌した。和氣子に「姉サンは何処へ行つたらう」と聞いて見た。「遠い間い方へ行つた」と答へた。小供に祖先崇拜の教育として「何故御先祖様の墓を参るのか」と聞いて見た。祖先の恩を知る様に説明した。

直に銀行へ出勤した。連合事務所へ行って下田に会ふ筈であったが

欠勤したので、今村氏に作興会の青年幹部講習会出席につき集会を開くべき通知の發送方を依頼した。中原の所から其の出席者名簿をとつて之に發送方を頼んだ。青柳日日記者来訪し、中原も来行して徳富先生招聘に関する蘇峯会に関して相談した。松下へ新盆見舞に訪問して帰った。毛賀へは尚夫を遣した。増恵信也共に腹痛で臥床した。

作興会及猶興社の赤神氏を頼んで懇談会をする事を通知出した。

八月十五日 金曜

組合支所へ行つて工場の練釜を修繕して居る工事を見た。続いて塩沢治雄の母か十三日死去したと聞いて見舞った。それから亡大島職工の新盆を見舞った。本所に行つて夏爾受人の状況を見て干燥人夫の減員を島太郎に話して、松島乙次郎や斉藤に会ふて談し、午後上飯銀行につとめた。中原に話して赤神氏来飯につき幹部青年の懇談会の話もした。明大の校友某書生二名来行して、予に面会を求めたので会ふた。彼等の口吻は無断で赤神氏をつかふ様な事であった。併し歓迎会をやから十七日一日滞在してもらいたいと電話で申し送つたのみだと話した。

二書生は村沢尚文と深沢某であると判明した。

宮沢敏子か来訪した。

八月十六日 土曜

午前八時十三分、横田明大学長か着飯すると云ふので駅迄出迎へた。一寸遅れたので学長は既に自動車中に居た。前年の挨拶をした。蕉梧堂へ一行七名か入りたので後を追ふて至り面会した。結局は米田博士も赤神良讓氏も来た。赤神氏に初て面会して、曾て郡下青年幹部か金

鶏学院にて講習をうけたるに付、来飯も機として歓迎の座談会を開きたいと思ふと前に電報を以て紹介した話をして其諾を得んとした。併し彼は大磯の宅に於て彼の周囲の学生を招いて十七日遊ぶ前約かあるからと云ふて断つた。吉野も来て共に応接間で話したか遂に駄目だった。午前中銀行へ出て、午後帰宅して塩沢治男の母の葬式に列した。初七日迄つとめて夕刻再び上飯して横田秀雄氏一行の歓迎会に臨んだ。明大の講演会が飯高の講堂で開かれたが、遂に葬式の為に聴く事か出来なかつた。赤神米田の両氏は宴半にして去つた。明大の講演会も賑やかだったと聞いた。

八月十七日 日曜

組合支所に至りしに本所にて川口来訪したれば来組せられたしとの事に本所に行き、川口と共に鳥清に於て昼食を共にす。川口、竜江組合の出荷勧誘の為来郡せりと云ふ。当組合の成行売を振売に出来ずやとの話をなしたるに、此問題は遂に不成功に終り、其の代りに可成荷渡を遅延して其れに代ふるに振売を以てする事と話出来たり。

昼食後風越館に開かれたる作興会青年幹部会に出席す。北原阿知之助、中原、吉野其他講習生十二名来会し、赤神氏を依頼し置きたるに、遂に同氏の用件にて帰京せられたれば止むなく会場を変更したいと述べ、思想問題其他現代世相に付吾等の雄飛すべき時至れりと談し、夕刻迄話せり。終つて猶興社の件につき話合ひて午後八時散す。猶興社は秋蚕上り総会を開き、部署を定め実行問題に付て進むべき旨を誓ふ。

八月十八日 月曜

午前中組合支所へ行きしに、石原、青山、江塚等居り、従業員及理事會惣代会等を開くべく時日を協議せり。神榮会社川口氏來訪し工場を一巡し、生糸取引に付話し、又可成振売をなし成行後は遅れてする事等を話す。正午上飯銀行出勤す。頭取來らず。片桐を信産へ派し、黒沢問題に付協議せしむ。

青山より市村を横浜へ同伴したる件につき話ありたるも断して不許私費を以て出張したるのならば止むを得ずと話せり。

午後仙寿樓に於て南信新聞重役會あり出席す。社員服務規定を議し給与規定を作る。又経営に於て新聞購讀者減じ三千四百部となる。因て経営上、毎月四百五〇円乃至五百円の欠損を見る。之を以て此欠損を経費節約によりてなすより外なしとて、社員の減俸及其他によつてやるより外なく、自給自足の計画を立つべく最高幹部會（社長、専務、取締、支配人、主筆）によりて立案する事として、池田主筆を招きて此問題を議せしむる事とし夕食を共にして分る。

予記 銀行へ青柳氏來り徳富氏の件に付打合せ。

社會の今日 樞府倫敦會議検査す。樞府の議事新聞に現はれ、殆ど議會の如し。樞府の議事の如きは名の如く秘せられたし。世の変し憂ふ。

八月十九日 火曜

暑氣甚し。坐すれとも汗下る。直に上飯銀行へ出勤す。午後一時より作興會幹部會を連合事務に開き、來る九月十日前後徳富蘇峰先生來郡すべければ（召聘により）其機を利用して本會大會を開き、如何にして此際國民精神作興を計るべきかに付き、此問題につきて討議し其の結末を付けるに、五名の委員を挙げて其結論を作製してもらふ事とせり。尚徳富氏に対しては蘇峰會員を此際若干募集して置く事、古文書

を蘇峰氏に展覽に供する事、會食をする事等打合せたり。話畢つて、中原、北原両氏と****財産整理と*行社の社金に付て話したり。瀧沢氏が二万五千円を投して**の土地を買入れくれるならば*行社の金も出ると述べたり。組合本所に従業員會を開き操業問題に付出演の後に付打合をなせり。

八月二十日 水曜

朝組合支所に立寄りて一巡す。時に屑物商來組し居り、青山も來組したるも腹痛すとて帰り居れり。口挽糸三百匁計り買受ける事とす。時に価は九貫目に付二百七十円なり。荷作して売渡す。午前十一時頃上飯す。途に田中一郎に会い話を聞く所によれば、泰阜地方の漁民七十名計り三信鐵道が工事中漁業を妨害すべければ何とかして補償をしてもらい度いと押寄せたるが如何すべきかとの事に、銀行へ呼び入れて「署長をして口を聴かしむる様數人の主なるものに話して、此際暴動的の事をなすに至れば君の身辺も危からん。此際他に鋭尖をそらして暴動化を防ぐべし」と教示して彼を警察に送る。聞けば七十名のものは警察署に居るとの事なりし。

次て大塚嘉十郎出行し、彼の差押問題に付談合せり。午後三時組合本所て開かれたる役員會に出席す。一時間遅れたり。事務員其他従業員の俸給寄付金採納に関する件は全体定額月額給料者の五分引、不況対策としては製糸部を二部制とする事、及一方に集中する事等の論議をなし、研究委員として江塚、田中、佐々木、金井の四名を挙げたり。支所に於て生徒を集め一場の話をなせり。

【語句の説明】三信鐵道：一九四三年に國鉄に買取され、現在はJR

東海道本線豊橋駅と中央本線辰野駅を結ぶ飯田線の一部となつてい

る、一九二六年に起工されたが、急峻な山あいには線路を通す工事は難工事であつた

八月二十一日 木曜

残暑甚し。汗淋漓として出づ。支所へ行き井深竹松と相談して従業員給料一部寄付採納に関して相談し、猶本所に至りて木下房吉と相談して同問題を如何に解決すべきかに就て話せり。理事会の俸給額の百分の五の寄付を採納する事として、定額月給者に諮る事としたり。正午上飯して銀行へ出席せしに、館林と会見を約したるも遂に会見出来ず。大塚問題、黒沢問題等につきて研究し事務を処断す。午後六時より本所に再び来りて工女を裡の広庭に集めて、繰糸に関して従業員数名出演し帰りたれば其の意見により大体の方針は異らざるも、細部の点に付て繰糸法方の注意を井深、塩沢より話し、優勝旗、個人表彰をも来月分より改正する事に話したり。午後九時帰宅す。夜遅くなりて帰宅すれば新聞さえよく読むを得ず。

疲労して眠る。尚夫、清泉地より帰る。

伊那史料叢書五部、篠田氏より買取、席岩へ贈る。

受信 荒井□平、赤神良讓

八月二十二日 金曜

残暑甚し。

午前中支所に至りて総代会の用意したり。青山専務病氣引籠不参。午前十時上飯銀行出勤す。午後一時退行して組合支所に来り惣代会に臨む。出席者半数に漸く満ち、春爾市価決定の件は簡単にすみたり。次で信用部、購買部、販売部事業の大体に付き方針及経過を報告し、

財界不況の際此難局に対して製糸部の二部制を以て労資の問題と失業問題と経費の問題を解決したしと述べ、既に役員中より委員を挙げて調査中であると報告し、秋爾蚕の提供と流言蜚語を信せず、共存共栄の此組合を守立てる事に御努力願ひ度しと結べり。午後六時終了後直に釣に行きしも僅に一尾を獲たるのみなり。

八月二十三日 土曜

残暑酷烈なり。午前中支所より上飯したり。

午後一時より商業学校講堂に於て羽生東洋先生追弔会あり、神式に行ふ。北原阿知之助、伊藤伝、中原等によりて主催たり。予も業務を休みて参加す。来会者七十名計りなり。未亡人、子息等来会し、親戚側として鷺沢一族出席す。会は午後四時終り、岡山に於ける高等興業銀行理事公森太郎氏の□吉先生に関する追憶伝、及支那経済事情及支那人根性に付面白き談あり。終了後松葉に於て晩饗会あり、予は公森氏に刺を通して談す。氏は年の割に白髪禿頭にて要点を把握したる紳士なり。健剛不敵の性質眉間に表る。支那人の根性として詐術に富める話あり。日本の外交より支那外交は組織的にして老獪なりとの話もありたり。赤穂よりバスをとりよせ帰る

予記 公森太郎氏に面会す。

八月二十四日 日曜

日曜日を利用して伊那電バスを赤穂より取りよせて伊那町迄鮎釣に行く。古史郎を伴ふ予定なりしも市内駅に邂逅する能はず、小西町長と同車して町長の快活なる話を聞きしが須臾にして話も尽き、居眠りて沢渡に下車して天竜川に瀬を捜し、か、鮎の居りそうな処なし。意を

決して入舟に下車して川に添ふて下る。同好の者両岸に釣するもの多し。親魚を三十銭を投して求め、橋の堤に出て、此処にて釣を試む。御子柴も釣り居り、二尾を獲て又下流に赴く。午後二時頃迄に三尾を獲たり。ゴミに親魚をとられんとして過て帽子釣竿を流し岸に上りて之を追求し幸にして之を獲、喬木館東の橋上にて試みたるも一尾も獲ず。午後五時頃迄に漸く三尾を獲たるのみにて帰る。帰途岡島来店にて、米売り二十一円なり。午後八時半頃帰宅。終日釣して漸く三尾を獲たり。疲労甚し。帰宅すれば却て骨折損の疲労もうけなりと家人に笑はる。信也、尚夫、小川渡浸りたり。

【語句の説明】 営業製糸

八月二十五日 月曜

暑気甚だしかりしが夕刻雷雨あり。

本所より支所を廻り上飯す。青山専務病氣中なりしか支所へ出勤す。本所を見廻りて上飯、飯田駅之バスを赤穂支店へ返戻すべく駅長及助役に頼みたり。正午銀行出勤す。放課後上柳に於て千代田商会決算に付て大平と共に出向す。書類を調査し出資金を残して三千円とし尚一万円は千代田商会に關し出資社員が保証することにしたらば如何と談じ合せ、一万円の保証を千代田生命保険に資出する事に決したり。喜右衛門、岡島余四郎来らず、不誠意なり。帰りに組合支所に来り従業員を集めて一場の話をなし、不況に對して尚一層甚だしくなる恐あれば堅忍不拔の誠心を持つこと、及給料五分を組合へ寄附する事の採納の件を申渡したり。

八月二十六日 火曜 (記事なし)

八月二十七日 水曜

組合支所に午前八時行き居りしに金田より電話来り、「千章危篤の由あれば直に出向せられたし、伴野へも通報せられたし」と申来る。依りて取るものも取り敢えず組合に其旨伝えて直に電車にて病氣見舞を買ひて出向す。途中虎史朗、北原姉と同車す。

主治医村沢等あり併も家族のもの皆涙くましき面して、代田母堂の如きは泣き居れり。直に病床に見看たるに危篤の状態にてもなし、腹痛甚しと云へとも左程の病氣にてもなし。自分は死ぬと云ひて大病の如く言ひ居れとも左程でもなし。氣を強く持つ様云ひしが、法主の説教の様なものだと返事し居れり。伊那町より二博士来り診察し、猶飯田より石井、吉川両医を招き診察を立合ひしが別に生命に別条なく、腹膜炎にても盲腸にてもなしと云はれたり。親類より後藤、上松彦太郎も立会す。然し左程の病氣にもなければ、午後四時送迎の帰りの自動車で帰る。莫迦らしき病氣見舞なり。

八月二十八日 木曜

組合支所より上飯す。支所に行きて電話にて優良工女表彰の日を青山と打合せたり。工場を一巡して上飯す。連合事務所に至り、下田に作興会の用件として蘇峰会員募集の事、国庫補助申請の件、赤化事件史発行の件(此件に付ては中原を呼びよせ彼に委託して書かしたるものを付して国庫及県へ提出の事とせり)作興会決算に關する件、思想史の売上集金をする事等を令したり。中原来りて以上の件を相談し、猶司令部に中原に命じて作らしめたる思想史の出版を司令部に頼む事等も二百部打合せ、警察館林を招きて青年会の状況、及一般思想傾

向に付き談話を試み、猶一層の不景気に際しては如何なる型なり暴化するかの研究もなしたり。

午後三時始めて銀行に出勤す。山口英九郎氏より金田に宛たる重役株売却等に関する手紙を見る。前島貫一來訪し***整理に関して話か纏らず、委任をうけたる事項に付ても不明の由申居たり。故に予は***、***は別として父か引受けたる等の話をせり。

八月二十九日 金曜

支所より本所を経て上飯す。

作興会にて徳富氏を聘するに付東京日日新聞記者青柳氏と交渉せり。青柳氏のキモイリにて徳富氏を召聘する事になり期日未だ決定せず。

本所に出頭して放課後セリプレーン個人表彰三名を夏□側帯を贈りて表彰す。表彰式を挙げて一場の訓示演舌を試みたり。八月分の表彰せるものは一人のみなりしも、七月分の表彰に値するもの二名ありたれば此二名も共に表彰せり。米を松岡屋に一升二十一円にて売る。

八月三十日 土曜

銀行へ出勤せしも午前中にて退出す。原□□、片山英氏来訪する由聞及びたれば、鼎下久堅等生糸を取扱ふ組合にて歓迎会を催さんと約す。支所より電話にて来訪通知ありたれば支所に行、工場を通過して後本場に行き、又工場を通過せり。併して自動車にて鼎の連中、牧野武田等と合同して下久堅組合を訪問す。時に組合長木下又十郎氏辞任の相談あり。役員会を開き居りたり。工場及倉庫を一巡して後、下久堅理事宮内専務、清水理事と会し天竜峡に下る。川口氏片山氏の案内役なり。次て天竜峡に上陸して天竜峡ホテルに入り川口、片山両氏を

接待す。両氏はホテルに一泊し予等組合側は九時帰る。

八月三十一日 日曜

朝霧の如き雨降る。銀行書記連中十二名計りと南向桂島福島製材場の召により用水路を干すから魚取りに来れと、曾て片桐が交渉し召かれたれば、午前七時十四分下山村発にて出向す。途中追々行員参加し大島駅下車徒歩連中と自動車連と合せて、先づ福島製材場を訪問し、主人初め皆歓迎をうけ茶を喫して片桐と共に釣に行く、兄片桐と同行し発電所の途中放流口の下にて初む。鮎少し多少のナリはあれとも釣手多くして漁少なし。漸く正午頃二尾を獲たるに片桐は終日零、友ズリ相四を獲たるのみなり。終日水中にあり疲労積りて水より出づ。福島製材場に帰り衣を改め、麦酒を供せられ獲たる魚を肴として饗せられ、片桐と共に帰途に就く。大島に至れば電話あり、千章入院手術するから直に來いと金田より申來る。直に行かんとせしに先づ電話にて先方の様子を聞きしに(片桐迄行きて)今晚入院手術するから直に來てくれと云はれしも疲労甚しければ兎角帰宅して後にせんと意を決し(先に宮沢久吉は片桐等に托したるも)帰りて宅へ其由を伝へ休養す。